「直島銭湯『I♥湯(アイラヴユ)』」は、2年前の夏、直島福武美術館財団理事長の福武總一郎氏から声をかけていただき昨年7月に完成したプロジェクトだ。「銭湯」と「タイル」は当然強い結びつきがあり、それが今回INAXとの御縁としてスタートした。浴室内「タイル」への協力をINAXさんに、当初はそれぐらいの思いだった。多くの人が「富士山」を思い浮かべる浴室内の「銭湯ペンキ絵」、それをタイルでできないか? ふと頭に浮かんだ何気ない思いつき、そんなことをきっかけに予期せぬ新たな展開に発展していったように思う。「モザイク」や「写真製版による焼き付け」等、思い描く頭の中のイメージと未経験の制作領域である「タイル/やきもの」との接点はどこにあるのか? 未経験である「銭湯タイル絵」に対する様々な角度からの試行錯誤は、限られた時間の中、自分自身の意思を超えて一気に加速していった。テーマは「富士山」から「海女景」へ、また制作方法も人の手を大幅に頼るモザイク画や写真技術による拡大前提の焼き付け画から絵具と筆のみによる原寸絵画へとすべてがガラガラと変化していった。

–

こちらの初歩的な疑問に対して誠意ある対応をしていただいた職人さんたちの対応をいいことに、厚かましくも調子に乗らせていただき、心おきなくキャッチボールをやらせていただけたことから創作の発火点が自分の中に生まれた。何か出来るかもしれない、大きな不安はいつしかとてつもない好奇心に変化していた。陶板壁画は最終的に、1点約2×4mの画面(1枚20×20cmのタイル189枚)、2点分(男湯女湯分計378枚、プラス予備分含め500枚あまり!)を型による手づくりで制作いただき、その上に絵具と筆を使って原寸で描くという方法になった。

「直島銭湯『I♥湯』」が無事予定通りオープンした今、改めて常滑での日々を思い起こすたび、そこで与えられた限りある時間の中、初めて経験する「陶板壁画」が一発勝負で焼き上がったこと、あの瞬間がその後の「銭湯建設作業」への大きな分岐点だったのだとつくづく思う。

「原因不明の窯全面停止による銭湯計画直前で中止!」今でも時々夢の中で壁画制作をする「悪夢のものづくり工房」がひょっこり顔を出す。やれやれ良かった。

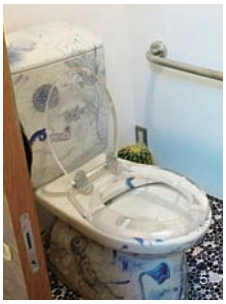
あの常滑での毎日、祈るような思いが常に描画作業に貼りついていた。最終的に炎にすべてを投げ出すためか、窯には気まぐれな神様がいる、焦っても仕様がない、信じろ、いつもそんなことを考えていた。窯の中で一体何が起るのか、こればかりは職人さんを含め誰もわからない。何が起きようとそれは誰のせいでもない、それは単純に「神様の気分」なのだという理屈がものすごくリアルに、またあたりまえにものづくり工房の空間にはあった。そういった思いをもって絵を描くといったことは経験したこともなく、ものづくり工房で過ごす毎日の時間の中に自分が置かれ、制作に専念できることには大きな喜びがあった。

–

常滑を去ってから、どこへ行っても足元のタイルや街中のやきものに目が向かう。それまで見過ごしてきた風景が全く違って見え、そこから新たな創作方法が浮かんでくる。今回銭湯正面で生き返ったテラコッタ群の風景は今まで自分の中になかった可能性を与えてくれた。INAXものづくり工房空間につながる「常滑磁場」、空き時間に案内していただいた常滑の路地を歩きながらそんなことを感じた。そんな得体の知れぬ「創造磁場」は、そこに関わる人の気持ちに反応するのかもしれない、そんなことを考えた。ものづくり工房で毎日を過ごす職人さんの迷惑もかえりみず、今またすぐそこに戻ってどんどんタイルに絵を描きたい、性懲りもなくそんな思いが込み上げる。

また一緒に仕事ができることを切に願っています。ありがとうございました。

[INAXニュースリリース・寄稿文より、一部割愛して転載]



1——『海女景I/竜宮珊瑚』| 2——『海女景II/大蛸』| 3——タイルに絵付けする大竹氏 | 4——缶バッチなどを埋め込んだ透明のカラン | 5——絵付けしたトイレ | 6——「直島銭湯『I♥湯』」外観

おおたけ・しんろう——画家/1955年生まれ。
主な展覧会:「大竹伸朗 全景 1955-2006」[東京都現代美術館/2006]、「貼(Shell & Occupy)1-4」[Take Ninagawa/2008-2009]など。